

定住と越冬

——ソビエト連邦期におけるカザフスタンの家畜飼育の事例から——

及川俊信

1. はじめに

本稿は、ソビエト連邦期のカザフスタンにおけるヒツジ飼育を中心とする家畜飼育の技術的諸変化について、遊牧から定住への移行を視点とした考察を行ない、特に定住化における越冬技術の変化の重要性を指摘することを試みるものである。

いわゆる「遊牧から定住へ」という世界の遊牧民の定住化に関する研究は、20世紀以降の世界的な遊牧民の定住化を背景とし、これまで多くの視点から研究がなされてきた。そして、そうした研究には、主に二つの一般的な記述が存在する。一つは、遊牧民の定住化は特に近代以降、定住生活を行なう農耕民との、主に土地の所有と利用の競合を背景として起きたとする記述である¹。もう一つは、遊牧は農耕が困難な自然環境に適応し食料生産を可能とするライフスタイルであるという記述で、主に生態人類学の立場からなされる場合が多く、比較的新しい主張であると言える²。そして、いずれの記述を行なう先行研究においても、遊牧が近代化以前の伝統技術であり、定住化が近代化のもたらしたものであるとする対立的な位置づけがなされている場合が多く、定住化における技術の導入の記述も、伝統技術のそれと比較して概説的に語られる傾向がある。こうした問題は、現在の人類学・民族学が近代化以前の伝統的ライフスタイルを多く継続している地域・民族を優先的に選択する現状が背景になっていると考えられる。

しかし筆者は、定住化による家畜飼育技術の変化は、牧畜研究において本来重要であると考え。なぜならカザフスタンの場合、ソビエト連邦時代における定住化以後の家畜頭数の推移には、増加と長期的な安定を見ることができる。カザフスタンで定住化以後特に主要な家畜となったヒツジとヤギの頭数は、1951年には1,760万頭だったのが1969年には3,535万頭と2倍以上に増加し、その後ソビエト連邦が崩壊する1991年まで頭数変化は安定している〔Народное хозяйство СССР статистический ежегодник 1958, 1969, 1990〕。また、ヒツジやヤギの飼育は後述する「チャバン」と呼ばれるカザフ人の職業牧夫によって行なわれており、そこには家畜群の限定的な季節移動を含めたかつての遊牧技術からの継続も多分に見出すことができる。すなわち、カザフスタンにおいて定住化以後の家畜飼育がどのような技術を導入し、家畜群の頭数の安定につながっていったかを知ることが、「遊牧から定住へ」というライフスタイルの転換を理解する上でも不可欠である。

本稿の研究内容は、主にソビエト連邦時代の文献の調査に基づくものであるが、筆者が2002年9月にカザフスタン南部のジャンブルスク州メルケ市で行なった現地調査による資料も用いる。

¹ カザフスタンを含む旧ソ連圏の各遊牧民の定住化は、定住農耕を遊牧の上位に置くマルキシズムに基づく政策によって展開しており、観念的な対立もまた重要な背景となっている。

² こうした立場の先行研究には、〔佐藤 1992〕や〔小長谷 1998〕などがある。

2. カザフ遊牧民の定住化

カザフ遊牧民の定住化は、帝政ロシア後期からソ連時代初期にかけて、大きく二つの段階を経ておこなわれた。最初の段階は、主に定住農耕を行なう入植者のための土地の確保である。帝政ロシアはカザフの3ジェズの併合後、1868年の農奴解放を契機にカザフスタン北部のステップ地域に多数のスラブ系農民を入植させた。そして、カザフ遊牧民の放牧地を国有地とみなす一方で、定住農耕を行なう入植者に一定面積の土地を配給するという制度により〔宇山 1997:12〕〔DEMKO 1969:60〕、カザフ遊牧民の放牧地および季節移動ルートは北部を中心に縮小された。帝政ロシア末期までには、カザフ遊牧民の多くは季節移動が夏季に限定され、その規模や移動距離を縮小した半遊牧のライフスタイルへと変化していき、定住農耕を行なうカザフ人も増加した。一方で、入植政策によって乳製品や食肉、羊毛などの経済的需要が拡大し、結果としてカザフスタンにおける牛、ヒツジ、ウマなどの家畜群の数は、ソビエト連邦初期の1930年代初頭まで増加していった〔OLCOTT 1995:93〕。

定住政策が徹底したのは次の段階の、1930年代の農業集団化期である。1930年に施行された農業集団化政策は輸出用小麦の増産を主な目的とし、カザフ遊牧に対しては家畜群の没収³と季節移動の禁止がなされ、集団農場が形成された。しかし、カザフ遊牧民は従来、家畜群を私有するライフスタイルであったために家畜群の大量屠殺などの社会的混乱が生じた。加えて、1932年を中心とするカザフスタン全体で発生した大寒波による凶作の中でも政府は穀物の調達を強行した。カザフ語でジュト(жыт)と呼ばれる雪害は周期的に発生する気象現象であり、かつてのカザフ遊牧民は家畜群の移動による被害の軽減を行なってきたが、季節移動の禁止と厩舎や飼料の不足が重なり、大規模な家畜の大量死が発生した。1928年には、カザフスタン全体で2000万頭以上存在していたヒツジが、1933年には170万頭と90%以上にまで激減している。〔OLCOTT 1981:138〕。カザフ人も国外逃亡や飢饉・疫病によって多数が犠牲となった。「1939年のカザフ人人口(当時の領域で233万人)と比較すると、飢饉、疫病の犠牲者は175万人、カザフ人全体の42%」という推測もある〔岡 1999:11:12〕。また、当時の農業集団化政策の徹底は、カザフスタン第一書記であるフィリップ・ガラシチョキン⁴個人による影響が大きく、彼はカザフ人の社会的コミュニティの解体が社会主義建設に必須であると考え、大規模な被害の発生の中でも集団化政策を徹底した。

カザフ遊牧民の定住化は、第一段階が50年間から60年間という比較的ゆるやかなプロセスの中で、農耕の導入と半遊牧への移行が行なわれた一方で、第二段階は5年間前後での農業集団化の徹底という極めて急激な変化であったことがわかる。そして、この時期における家畜群の激減が、次章で論じるその後のカザフスタンの家畜飼育における変化、すなわち、家畜群の最大化と頭数の安定、さらに質の向上による経済的需要への適応という、3つの課題とその解決へとつながっていった。

³ 1932年10月には少数の家畜の私有が認可され、その後の家畜群の回復につながっていった。また、家畜群の私有は1991年のカザフスタン共和国独立後にも急増しており、そこには政治的・経済的理由の他にカザフ人の家畜群に対する私有の概念が多分に影響しており、興味深い。

⁴ 1923年9月12日にクズィルオルダ州に赴任後、1930年カザフスタンの第一書記長に就任。1932年に解任、ラーゲリに流刑された。精力的な社会主義活動により、革命前後に何度も国外追放、逮捕、流刑、逃亡、懲役刑と保釈という特異な経歴を有する人物でもある〔Михайлов 1990:15-36〕。

3. 定住化と越冬技術

1930年代前半の農業集団化政策による家畜群の激減は、越冬用厩舎の建設や飼料供給の確保が、定住化の徹底に間に合わなかった事を背景のひとつとしている。すなわち、農業集団化期以降のカザフスタンにおける家畜飼育の変化においては、家畜群の越冬が最も重要な課題であった。

カザフスタンの家畜飼育における越冬の重要性を先見的に主張した初期の文献には、〔Княцкий 1933〕がある。〔Княцкий 1933〕は、越冬技術の発展が家畜生産の向上と消費の減少を効果的にするものとして強調し、カザフスタンの南部および南東部の、天山山脈山麓を中心とする冬季の飼料栽培に関する技術的考察を行なっている。加えて、冬季の厩舎、および雪上放牧地（秋季に収穫・加工した飼料を必要とする）の準備、ヒツジの新品種改良、放牧ブリガーダの編成による家畜群の結合と規模の増大などについても言及している。これらはすべて、以後のソビエト連邦期における家畜飼育の一連の技術的变化に合致する内容であり、家畜飼育技術の変化と政策の変革・施行にタイムラグが生じていた事が指摘できる。

本章ではこうした農業集団化期以後のカザフスタンにおける家畜飼育技術の変化において、特に越冬技術を中心にそれぞれ考察していく。

3-1 職業牧夫チャバン

ソビエト連邦時代、各コルホーズ、ソフホーズで共有された家畜群のうち、ロシア人やウクライナ人による固定された牧場での家畜飼育と同時に、チャバン(чабан)⁵と呼ばれるカザフ人の職業牧夫による、家畜群の季節移動を伴う委託管理が行なわれた。チャバンは家畜群の委託によって成立する名称である一方で、ソ連時代はコルホーズ、ソフホーズにおける畜産ブリガーダの成員として位置づけられている。チャバンは基本的に家族単位で家畜群の季節移動を行ない、家畜群は種類に応じて別々に放牧・管理される。すなわち、農業集団化期はコミュニティ単位での季節移動が禁止されたが、家畜飼育の専門職業化によって、家畜群の季節移動が再開・継続したのである。

ソビエト連邦時代は、政府によるチャバンの養成施設も存在していた。1973年の事例として、カザフスタン東部のセミパラチンスク州のアルティ・ジュルディズ・ブリガーダでは11名の生徒に3,232頭のヒツジと、それ以外に妊娠可能な牝ヒツジ1420頭が委託され、仔ヒツジの出産数、剪毛量、体重のそれぞれに課せられたノルマのもと、1年間の養成が行なわれている〔Умирбеков 1975:16〕。ここでは、ヒツジの剪毛や交配など、本来専門のチャバンや獣医によって行なわれる一連の専門技術が総合的に教育された。また、越冬に関しては、主に冬季に妊娠する牝ヒツジの給餌に関する詳細な内容があり、干草、発酵させた干草、大麦、濃厚飼料、塩分などを選択的に給餌することで栄養管理を行なっている。

⁵ 2002年の現地調査では、担当する家畜の種類に応じてチャバンの名称は異なり、ウシの場合はシルシ(сыршы)、ウマの場合はジュイルクイシ(жылқышы)、ヒツジの場合はチャバン、またはコイシイ(қойшы)と呼ばれ、職業牧夫としてのチャバンは家畜飼育者の総称であるショパン(шопан)と区別される。また、剪毛や交配などの専門技術による下位分類も存在する〔Попова 1994:75〕。

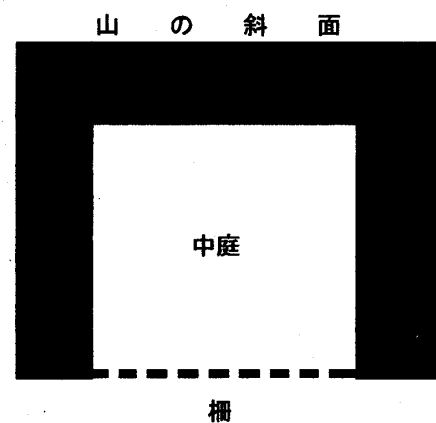
こうした、チャバンによる家畜群の季節移動を伴う委託管理における家畜飼育技術には、家畜の交配における人工授精やノルマの設定などのソビエト連邦時代に導入された新技術と、家畜の交配時期や季節移動など、従来の遊牧から継続したチャバンの経験に基づく技術の両方を見ることができる。

3-2 越冬用厩舎

厩舎を用いた家畜群の越冬は、吹雪やジュトと呼ばれる雪害に際して家畜群の凍死を防ぎ、頭数の安定につながる機能を有する。実際、厩舎の普及率の高いロシア人農民の家畜群は、冬季も放牧地を用いる割合の高いカザフ遊牧民の家畜群に比べ、頭数の増減が安定していた [DEMKO 1969: 180]。また、越冬用厩舎の絶対数の不足が、1930年代前半における家畜群の激減の直接要因であった。カザフ遊牧民は越冬において、冬季の強風や吹雪を軽減する目的で丘陵や山岳部に移動し、放牧地の移動によって被害を軽減していた。そのため、農業集団化による家畜群の移動の禁止は、厩舎の不足と重なって被害を拡大したのである。

現在のカザフスタンにおける越冬用厩舎の多くは、ソビエト連邦時代に建設されたものである。その意味では、越冬用厩舎の普及はソビエト連邦時代から本格化したと考えることもできる。しかし、越冬用厩舎の基本構造を考察した場合、それは、必ずしも新技術の導入ではないことが指摘できる。

2002年の現地調査によるジャンブルスク郡メルケ市南部近郊の山麓にあるヒツジ用の厩舎の場合、私有するヒツジ群は季節に関係なく、夜間の飼育に用いられている。この厩舎は、夏季放牧地に立地しているが、その年によって越冬を行なう場合もあるため、越冬用厩舎としても機能する構造を有している (右図)。石、木、セメント、トタンで建設された厩舎はコの字型の構造で、厩舎の背面となる北側は山の斜面に隣接している。これは、冬季の強風を防ぎ厩舎内の防寒効果をより高める構造となっている。また、厩舎は一面を開放した左右と、厚いレンガ壁で前面をかこった奥の各部に分かれており、夏と冬、あるいはヒツジの年齢による選択が可能な構造となっており、冬季の飼料である干草の保存にも用いられる。中庭は冬季において、朝にヒツジ群を解放し、昼の放牧まで待機する場所として機能する。また、



厩舎の周囲にも石囲いが建設されており、冬季におけるヒツジ群の給餌の場所として用いられている。チャバンは越冬用厩舎に隣接して建てられた石、レンガ、コンクリート製の越冬用住居を有すると同時に、夏季はキーズ・ウィ(кнiз уй)、あるいはロシア語でユルトと呼ばれる移動式の天幕に居住する。

斜面を背にしてコの字型に建築する越冬用厩舎の構造は、メルケの山麓に限らず、丘陵ステップにおいても見ることができる [Emeljanenko 1994:53]。いずれもソビエト連邦時代に建設された厩舎であるが、少なくともソ連時代以前の19世紀後半には、カザフ遊牧民の冬営地には石製の越冬用厩舎が存在しており [Ауэзов, И др. 1957: 417]、東部や南部で半遊牧を行なうカザフ遊牧民が、石と土による越冬用の建物を建設していたことがわかる [Востров и Захарова 1989:60-67]。他にも、

現在も遊牧を行なうモンゴル国及び内モンゴルの地域においても、越冬にはほぼ同一の各機能を有する越冬用厩舎が存在している。

越冬用厩舎の定住を前提とした普及はソビエト連邦時代に行なわれたが、越冬用厩舎の使用それ自体はカザフ遊牧民の越冬における既存の技術であり、厩舎の材質や基本構造から考察しても、遊牧、半遊牧の越冬技術を多分に反映し継続した面が多いと考えられる。越冬用厩舎は、遊牧と定住という家畜飼育の問題の上で重要な位置を占めるだけに、今後の中央アジアにおける家畜飼育研究において、その構造や使用の比較など、より広範かつ詳細な調査研究を行なう必要があると考える。

3-3 飼料作物と播種

厩舎を用いた一定の場所での家畜群の越冬には、家畜群の規模に応じた量の飼料が必要となる。そして、カザフスタンの家畜飼育の変遷を考察する上で、ソ連時代における飼料の変化、特に飼料作物の播種は重要な意味を持つ。

定住以前のカザフ遊牧民は基本的に農耕を行わず、家畜群を喪失し季節移動が困難になった場合に、越冬地で牧草やミレットの播種を行なう程度であった〔Толыбеков 1971:249〕。ミレットは高い栽培技術を必要とせず短期間で耕作が可能のため、その後、半遊牧を営むカザフ遊牧民の冬季の飼料用穀物として、家畜群の季節移動との兼業が行なわれた。

ソ連時代からの飼料作物の変化の事例として、アルマアタ州クガリンスク地区に設置されたスターリン・コルホーズでは、1934年当時カザフ人とウクライナ人によって農業と畜産が行なわれていたが、総面積における放牧地と草刈場の割合が全体の約57%であり、1935年における畜産による収入は総収入の53.9%にのぼった。農作物は小麦と大麦を中心とする一方で、飼料用作物としての黍類、えん麦の栽培も行なわれていた〔Казахский Научно-Исследовательский Институт 1936:56〕。こうした、農業と畜産を兼業するコルホーズやソフホーズの形成によって飼料の栽培と確保がなされていったのである。

また、越冬時の飼料としての濃厚飼料の使用がソ連時代から行なわれている。濃厚飼料とは、穀物や牧草を主原料とし、時にミネラル分、塩分を添加した粉状あるいはペレット状の飼料であり、たんぱく質・脂肪・炭水化物などの栄養分に富む。越冬時の交尾前、妊娠期、出産後の牝ヒツジに対する濃厚飼料の給餌は、出産効率を高め仔ヒツジの死亡率を低める目的で行なわれた〔Умирбеков 1975:18-22〕。濃厚飼料が栽培飼料を原料とすることを考えると、ソビエト連邦時代以降の家畜飼育においては、越冬時における栽培飼料がより重要な役割を有していたことがわかる。

カザフスタン全体の飼料用作物の播種面積は、1950年で121万4,000ヘクタールだったのが、1974年には905万1,000ヘクタールに拡大しており、そのうち多年生草、一年生草播種面積が占める割合は1950年で93.8%、1974年で75.2%である〔Народное хозяйство СССР статистический ежегодник 1958, 1974〕。飼料用作物の播種面積の拡大は、天然草刈場面積と天然放牧場面積に大きな増減が見られないことと比較して極めて顕著である。また、飼料用作物の種類の変化もここでは指摘することができる。

さらに、越冬用飼料の栽培・収穫・運搬・加工には、MTC（機械トラクターステーション）による農業機械と運搬車両の存在も重要である。こうした機械の使用によって多量の飼料の確保が可能となり、厩舎での越冬を行なう家畜群の頭数の安定と最大化に結びついたのである。

3-4 季節移動

定住以前のカザフ遊牧民は、冬季と夏季の放牧地⁶での数ヶ月間の滞在をのぞいて、ほぼ毎日家畜群の季節移動を行ない、年間の移動距離は主に気候と植生に応じて異なっていた。アルマトゥ国立博物館所蔵の Наумова, X. И др.による、「19世紀後半から20世紀初頭にかけての遊牧ルートと給水地」の図表⁷によれば、植生の乏しい西カザフスタンの冬季放牧地と夏季放牧地との直線距離は約1,000kmに及び、南部の天山山脈南部や北部では100km前後からそれ未満である。また、各アウル（遊牧上の最小の構成集団）は夏季に集住し、冬季は分散する形態をとっていた。

ソビエト連邦時代の定住化政策は、遊牧を「生存様式の最初の形態」とし、家畜の馴化を「未開段階の中段階」と位置づけ、文明の発展段階において定住農耕より劣位にあるとするマルクス経済学の解釈による影響が大きい〔後藤 1970:5〕。しかし、チャバンによる家畜群の季節移動は、その後のコルホーズ、ソフホーズにおいて継続されている。

1960年代の事例として、カザフスタン南東部のアルマアタ州における二つのコルホーズ、「第22回 KPSS（全ソ連共産党大会）記念コルホーズ」と「ジェットイス・コルホーズ」は、季節ごとの放牧地と季節移動ルートを有し、夏季放牧地から冬季放牧地までの距離は250kmから500kmであった。夏季放牧地は牧草と水が豊富で蚊などの害虫の少ない山岳地帯に位置し、コルホーズ本部からは100-200km離れていた。冬季放牧地への家畜群の移動は、水の確保を目的に降雪の確認後に行なわれ、事前に飼料の準備と越冬用の住居や家畜群の囲いの新築・修繕が行なわれた。チャバンの季節移動には自動車も用いられたが、家畜群の移動によって放牧地にダメージを与えやすい季節移動の手順は、チャバンの伝統と経験が必要であった。冬季放牧地では、朝7時にヒツジ群を厩舎から出し、柵内で健康状態をチェックした後に放牧地に移動させた。昼間の放牧地は一定だが、帰途は牧草の節約とヒツジの肥育状態を維持のため、異なるルートを通って草を食べさせた。地面が凍って滑りやすい日は放牧を行わず、厩舎内での干草の給餌を行なった。厩舎内のヒツジの糞は回収して燃料とし、ヒツジの食欲を増進し肥育させるために岩塩が与えられた〔Маргулан 1967: 48-53〕。

家畜群の季節移動は農業集団化期以降において、コルホーズ、ソフホーズの成員である職業牧夫チャバンによって再開・継続された。それは家畜群の頭数の回復、安定、最大化という政策と自然環境へ

6 季節ごとの放牧地の名称はそれぞれ、春期はコクテウ(көктеу)、夏季はジャイラウ(жайлау)、秋季はクズディク(күздік)、冬期はクイスタウ(қыстау)と呼ばれた。また、春期と秋季の放牧地はほぼ同一の場所であった。

7 図表は〔及川 2003:10-14〕で引用している。また、また、〔Андріанов 1985:232〕による図表「1926年から1930年にかけての放牧地と家畜群の移動ルート」との比較を行なうと、後者の時期にはカザフスタン北部の冬小麦栽培地域から遊牧ルートが消滅していることなどがわかる。

の適応によるものである。重要なのは、家畜群の季節移動や越冬時の諸技術、すなわち厩舎や柵内におけるヒツジの時間的な管理、移動ルートの設定、燃料としての家畜の糞の使用、岩塩の補給などに、モンゴルや他のチュルク系諸民族の家畜飼育にも共通の事例が見られる、定住化以前の家畜飼育の伝統技術が継続していることである。同時に、上記の事例でも越冬時の厩舎や干草の重要性もあらためて指摘することができ、そこにソビエト連邦時代のカザフスタンの家畜飼育における特徴があると考えられる。

3-5 天気予報

越冬用の厩舎や住居の準備や飼料の調達、秋季における剪毛、冬季放牧地への家畜群の移動は、その時期や規模を決定する上で、その年の冬の降雪、吹雪、雪害の予測が重要となる。ソビエト連邦期以前の天候の予測は家畜飼育者の経験と勘によって行なわれてきたが、ソビエト連邦期からはモールス信号や無線を用いた天気予報が導入された。

カザフスタンでは1954年の時点で30の天気情報ステーション(ИРМС)が建設され、別に自動車を用いた移動式の天気情報ステーションも組織された。天気情報ステーションは畜産を行なう各地域に分散した形で配置され、そこで予測・作成された天気予報は各コルホーズ、ソフホーズの職員によって、家畜飼育を行なう現場に伝達された。チャバンもまたそうした天気予報の伝達役として、ウマを用いて放牧地への情報伝達を毎日行なった。天気予報の伝達役は、伝達の他にも現地の天候や降雨、降雪、そして植物の観測の行ない、それらの情報を天気情報ステーションに報告した。また、嵐の到来などの緊急時は、照明弾を用いた天気予報の情報伝達が行なわれた。また、全国や各州の天気予報はラジオによって3日分が発信された。

冬季の放牧地には、吹雪などの避難用に臨時の厩舎と飼料、水が用意されている場所が設けられていた。カザフスタン中西部のアクチュビンスク州では3月24日、天候の急変が天気情報ステーションで予測され、コルホーズの管理責任者による伝達と指示によって、春期放牧地に移動中の家畜群を臨時の避難場所に移動し、降雨と吹雪による被害を回避できた〔Порфирьев 1954:5-10〕。

家畜群を吹雪や雪害から回避しその頭数を維持する上で、天候の予測は家畜飼育における越冬技術のひとつである。そして、定住以前の吹雪や雪害の回避は、主に家畜群の移動によってなされていたが、天気予報の導入による天候の予測の技術的向上は、越冬の準備や緊急時の避難場所の使用を、効率的に行なうことを可能としたのである。すなわち天気予報の導入は、従来の越冬技術のひとつである家畜群の移動を縮小し、厩舎や飼料の重要性をより高める役割を有していたと言えるだろう。

3-6 家畜の種類の変化と品種改良

家畜の種類を選択と品種改良は、各地域や時代の自然環境や経済的需要を反映してなされる。カザフスタンにおける家畜の種類の変化は帝政ロシア期から開始しており、北部を中心とした入植農民による乳牛の飼育の拡大と、乳製品、食肉、毛皮、皮革といった家畜生産物の経済的需要が増大した。ソビエト連邦時代以降は、主に肉用・乳用としてのウシと、肉用・羊毛用としてのヒツジの割合と頭

数が増大し、反対に、かつて役畜として主要な役割を担っていたウマとラクダは、主に自動車の普及によって減少した⁸。特にヒツジは、羊毛と食肉の生産量の増大と質の向上を目的に、品種改良による粗毛種から細毛種、中毛種、食肉種への転換が行なわれた。

羊毛の利用方法として、かつての中央アジア遊牧民は主にフェルト生産、西南アジア遊牧民は織布生産を目的とする地理的な分布が存在し〔後藤 1970:73〕、カザフスタンでは主に粗毛種のヒツジが飼育されていた。細毛種であるメリノ種の飼育はソビエト連邦期以前にも行なわれていたが、当時はまだ羊毛生産をあまり行なっておらず、メリノ種が粗毛種に比べて耐寒性が低く飼料を用いた飼育が必要であるという、技術的な問題もあった。羊毛生産が政策上本格化したのは、1926年におけるヒツジ生産ソフホーズの建設・管理と農業機械の導入を行なう牧羊株式会社の設立以降からであり〔Сексенбаев 1968:32〕、先述したアルマアタ州のスターリン・コルホーズでは、畜産収入全体における羊毛生産の割合が、1932年の4.5%から1935年の24.0%へと上昇している〔Казахский Научно-Исследовательский Институт 1936:61〕。

カザフスタンのコルホーズでは大別すると細毛種、中毛種、スムーシュカ（仔ヒツジの毛皮）種、肉脂肪種の4種類のヒツジが主に飼育され、粗毛種を飼育するコルホーズ、ソフホーズは全体の五割程度であった。〔Ермеков, и Баканоба 1958:3-4〕。品種改良の例として、カザフスタンでは粗毛種の牝との交配によって、毛皮用と食肉羊毛用の二種類のソビエトメリノ種が改良され、主に南部の乾燥ステップ地域や半砂漠地域で飼育された。また、1930年から48年にかけて交配された毛皮食肉種のアルタイスク種は強い耐寒性を有し、北部カザフスタンの農耕と畜産の兼業ステップ地域、細毛種のみ集中的に飼育するステップ地域、また乾燥ステップ地域で飼育された〔Ермеков, и Баканоба 1958:6-17〕。こうした、寒さや乾燥あるいは高地の移動といったカザフスタンの各地の自然環境と、羊毛、毛皮、食肉生産と質の向上という経済的需要の両方に適応したヒツジの品種改良が、ソビエト連邦時代には多数行なわれた。

耐寒性の強さをはじめとする自然環境に適応した家畜の品種改良は、広義の越冬技術であると言える。しかし同時に、細毛種などへの種の転換は、飼料と厩舎を用いた組織的な家畜飼育を必要とした。それゆえ、家畜の種類の変化と品種改良は、それ自体が越冬技術であると同時に、越冬技術の変化を導く要因でもあったと言える。

4. 現地調査から —— メルケ市の事例より ——

ここでは筆者が2002年9月の現地調査を行なった、カザフスタン南部のジャンブルスク州メルケ市におけるソビエト連邦時代の家畜飼育について、現地の畜産コルホーズの管理職を経験したV氏のインタビューをもとに考察する。メルケ市はカザフスタン南部のジャンブルスク州にあり、2002年の時点で約7万人の人口を有し、5つのアウル（小村）によって構成されている。

⁸ 1986年の時点で、カザフスタン各州におけるブタとニワトリを除く家畜の種類別の頭数割合は、ウシの割合が多い北部の州を除き、ヒツジとヤギの割合が全体の80%から90%を占め、ウマは10%未満、ラクダは1%前後かそれ未満となっている〔及川 2003:55-59〕。

メルケ市は南部の天山山脈から流れるメルケ川と支流にまたがる形で位置し、北部はステップが展開している。ソ連時代は各アウルごとに同名の農業・畜産コルホーズを有し、調査時もトラクターなどの農業機械や事務所などの当時の施設をそのまま使用していた。

V氏の叔父はチャバンであり、コルホーズから委託されたヒツジ群の委託飼育を行っていた。委託飼育は、食肉用か羊毛用かという用途の選択や、頭数の増大などの行政上のノルマに基づく年間計画のもとで行なわれ、剪毛・食肉加工の工場への出荷までがチャバンの委託飼育の期間であった。V氏はメルケ市のチャバンの季節移動に関して、夏季はクルグズスタン国境に接する天山山脈山麓で放牧を行ない、冬季は北のマインクム砂漠付近に家畜群を移動させるとのことであった。夏季放牧地と冬季放牧地との直線距離は、約100kmほどである。この点は、[Андрянов 1985:232]の季節移動ルートの図式にほぼ一致しており、ソ連時代以前の遊牧・半遊牧からの季節移動の継続性が指摘できる。また、V氏は夏季放牧地がその年によって冬季放牧地として用いられる場合もあり、家畜群の季節移動は家畜の種類ごとに行なわれるため、そのルートは必ずしも単一のものではないと語っている。そのため、ソ連時代からは夏季放牧地と冬季放牧地の両方に、越冬用の厩舎が建築された。

筆者が現地調査を行なった9月は、トウモロコシの収穫・加工と干草用の牧草の収穫が行なわれていた。農場や牧草地は植林された樹林で数百メートル間隔に区切られており、灌漑水路も設置されていた。カザフスタン南部はソビエト連邦期以前から、灌漑によるオアシス農耕が行なわれていた地域であったが、こうした大規模な樹林や水路はソ連時代に建設されている。

こうしたメルケ市の事例からは、ソビエト連邦時代のチャバンによる季節移動を伴う家畜飼育において、放牧地や移動距離の面で定住以前からの継続性が存在する一方で、農業機械を用いた灌漑農耕による飼料の生産・供給や越冬用の厩舎が、技術的要素として重要性を有していたことがわかる。そして、そうした技術的変化は家畜群の頭数増大という行政上のノルマに基づくものであった。

5. おわりに

カザフスタンにおける家畜飼育は1930年代の農業集団化の強制による家畜群の激減以降、家畜群の最大化、頭数の安定、質の向上による経済的需要への適応を課題とし、その解決としてチャバンによる家畜群の委託飼育が行なわれた。チャバンによる家畜群の委託飼育では、家畜群の季節移動をコミュニティの定住後も継続したが、より重要なのは、本稿で論じた厩舎や飼料の導入をはじめとする越冬技術の変化であった。遊牧・半遊牧社会においては、冬季や周期的な雪害による家畜群の頭数変動には、家畜群の過剰な増大と富の集中を抑制する、自然環境と社会に対する調整機能が存在した。ソビエト連邦時代の家畜飼育は越冬技術を強化することによって、家畜群の頭数の回復と最大化、そして安定が行なわれたのである。

しかし、ソビエト連邦期に導入された越冬技術を個々に考察すると、厩舎の使用や飼料作物の播種、そして他の諸技術においても、それらの技術の多くが時期や規模などが限定した形ながら、定住以前から存在していた事が指摘できる。すなわち、いわゆる「遊牧から定住へ」というライフスタイルの転換において、カザフスタンでは全く異なる家畜飼育技術に転換したのではなく、定住以前から存在

する家畜飼育技術のうち越冬技術を選択的に特化することでその安定を実現したと言える。

また、ソビエト連邦時代のカザフスタンの家畜飼育は、化石燃料の供給と使用を前提としている点も重要である。飼料、厩舎、家畜生産物の供給や運送は、すべてトラクター、トラック、鉄道、船舶などの化石燃料を用いた機械の導入によって大規模化が実現している。1991年のソビエト連邦崩壊に伴う独立後、カザフスタンではハイパーインフレの影響などから家畜群の頭数が急激な減少傾向にあるが〔平田 2002:170〕、家畜飼育に必要な飼料の供給不足といった問題において、化石燃料の供給と使用の重要性が指摘できる。

このように、ソビエト連邦時代のカザフスタンにおける家畜飼育の技術的变化、中でも越冬技術の変化は、遊牧民の定住化における家畜飼育技術の歴史的変化と連続性、そして、政治・経済・自然・エネルギー環境への適応としての家畜飼育を考察する上で、多くの示唆に富んでいる。それゆえ、今後の遊牧・牧畜研究においても、越冬技術は調査・研究の課題を多分に有していると考えられる。

《参考文献》

宇山智彦

1997 「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観—M.ドゥラトフ『めざめよ、カザフ!』を中心に—」 『スラブ研究』44 pp.1-33.

及川俊信

2003 「ソビエト連邦期カザフスタンの家畜飼育における諸変化——「遊牧」からの移行という視点を中心に——」 千葉大学大学院文学研究科(修士論文)。

岡奈津子

1999 「カザフスタンの人口変動」 一橋大学経済研究所報告集 Discussion Paper No.D98-16.

後藤富男

1970 『騎馬遊牧民』 近藤出版社。

小長谷有紀

1998 『草原の遊牧文明』 千里文化財団。

佐藤俊

1992 『レンディーレ：北ケニアのラクダ遊牧民』 弘文堂。

平田昌弘

2002 「中央アジアの乳加工体系——カザフ系牧畜民の事例を通して——」 『民族学研究』67-2 pp.158-181.

DEMKO, G.

1969 *The Russian Colonization of Kazakhstan 1896-1916* Indiana University.

EMELJANENKO, T. & POPOVA, L. & LEEUWEN, C.V.

1994 *Nomads in Central Asia – Animal husbandry and culture in transition (19th-20th century)* Royal Tropical Institute-Amsterdam.

OLCOTT, M. B.

1981 “The Collectivization Drive in Kazakhstan” *The Russian Review* Vol.40,no.2 pp.122-142.

1995 *The Kazakhs – 2nd Ed –* Sanford University.

Андрянов, Б.,

1985 *Неоседлое население мира* НАУКА Москва.

Ауэзов, М. и др.

1957 *История Казахской ССР. том 1* Алма-Ата.

- Ермеков, М. и Баканова, Е.
1958 *Плановые породы овец Казахстана* Алма-Ата.
Казахский Научно-Исследовательский Институт
1936 *Животноводство Казахстана на подъеме* Алма-Ата.
- Княткий, П. Ф.
1933 *Зимовка овец в Казахстане* Алма-Ата.
- Маргулан, А. Х. и др.
1967 *Культура и быт Казахского колхозного аула* Алма-Ата.
- Михайлов, В. Ф.
1990 *Хроника великого джута* Алма-Ата.
Государственный комитет СССР по статистике
Народное хозяйство СССР статистический ежегодник Москва: Госстатиздат
(1958, 1969, 1974, 1990).
- Порфирьев, И. Ф. и Федосеев, А. П.
1954 *При организации пастбищ скота зимой —учитывая прогноз погоды—*
Алма-Ата.
- Сексенбаев, О.
1968 *Строительство совхозов в Казахстане 1917-1937* Алма-Ата.
- Толывеков, С.
1971 *Кочевое общество казахов в XVIII — начале XX века* Алма-Ата.
- Умирбеков, Т.
1975 *Чабан-хозяин степи* Москва.

(おいかわ としのぶ・株式会社やまと外食事業部)